

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 30 日現在

機関番号：25406

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26884040

研究課題名(和文)日本語学習者の自動詞・他動詞の誤用に対するヒューマンエラーからの検討と教材化

研究課題名(英文)The Effect of Colors in Memorizing Japanese Transitive and Intransitive Verbs

研究代表者

中石 ゆうこ(Nakaishi, Yuko)

県立広島大学・公立大学の部局等・助教

研究者番号：20535885

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文):日本語の自動詞・他動詞の区別は、第二言語として習得するには、上級学習者であっても難しいとされる。そこで本研究では、「ヒューマンエラー」という認知科学の概念に着想を得て、自動詞、他動詞を色分けして提示することの効果を検証した。研究の結果、自動詞、他動詞を色分けしたカードでも、単色のカードでも、学習の後は成績が向上し、両群の成績には差がなかった。

よって、自動詞、他動詞の学習教材では、学習者の判断で、動詞の色を単色か、色分けしたもので自由を選んで学習できるように設計した。これらの教材は、ホームページおよびスマートフォン用の学習アプリとして公開した。今後、これらの教材の学習効果の測定を行いたい。

研究成果の概要(英文):This study examined how the acquisition of Japanese intransitive-transitive paired verbs by the learners of Japanese is affected by colors. The subjects were divided into two groups and memorized intransitive-transitive paired verbs using the cards written in either black letters or colored letters (transitive verbs in blue and intransitive verbs in red). The two groups were required to identify the given verbs as either intransitive or transitive in the pre-test and the post-test. The study found that there was no significant difference in result between the scores of black letters group and colored letters group. This result was applied for development of teaching materials on transitive and intransitive verbs. The teaching materials were published on the Web and Mobile App.

研究分野：日本語教育

キーワード：自動詞 他動詞 日本語 第二言語 色の効果 教材 ヒューマンエラー

1. 研究開始当初の背景

多くの日本人は自身の英語学習において、例えば rise-raise, lie-lay のように形態が異なる自動詞、他動詞に出会ったときに、どちらが自動詞でどちらが他動詞かを区別して記憶することに困難を感じた経験があるだろう。

日本語の自動詞、他動詞は、このような異形態のものが多いことが特徴であり、図1で示すように、主要な対応パターンだけでも9種類ある(佐久間 1936)。例えば、「開く - 開ける」、「決まる - 決める」のように、日本語では異形態の動詞対が英語などに比べて非常に多い。学習者にとって、これらの自動詞、他動詞を一つずつ区別して記憶することは大きな負担である。

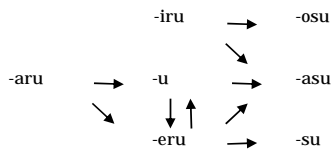


図1. 自動詞、他動詞の形態的対応
(佐久間 1936)

自動詞、他動詞は日本語教育においては初級段階で提示される教授項目であるが、上級になっても習得が難しいと言われる(小林 1996)。自動詞、他動詞の習得の目標には二つのポイントがある。まず、「習得の目標1」として、ある語が自動詞なのか他動詞なのかを覚えることである。次の段階では、「習得の目標2」として、ある場面で自動詞表現が適切なのか、他動詞表現が適切なのかという判断が的確にできるようになることである。これらはいずれも学習者にとって難しいと言われる、それぞれ教授に有効な手立てを見つけないといけない。しかし、一般に「自動詞、他動詞の習得が難しい」と言われる場合には、これら二つの習得の目標が混在して捉えられる場合が多く、従来の日本語教育の指導では、上に挙げた二つの習得段階が明確に区別されることは必ずしも行われていなかった。本研究はこれらのうち、冒頭に挙げた「習得の目標1」である自動詞、他動詞の区別が、それぞれの動詞についてできるかどうかを焦点化したものである。

自動詞、他動詞の形態的な対応パターンが教室で紹介されることもあるが、「これならば一つずつ覚えた方がよい」(小林 2001)といわれるほど、指導するには複雑な体系であり、自動詞・他動詞の区別は上級レベルであっても難しいとされる(Morita 2004)。

従来の日本語教科書では、本文中や巻末に主要な自動詞、他動詞の対応表を載せ、表を参照しつつ、徐々に覚えてもらうという方針をとっている。この指導法を受けている現在

の学習者が上級になっても、自動詞・他動詞の両方が揃わないフェーズに留まったままであるのであれば、これとは別の指導法を模索することが必要となる。そこで本研究では、従来の指導法の壁を超えるための視点として、「ヒューマンエラー」という認知科学の概念に着目する。

人間の活動全般のエラーを扱う分野に目を向けると、ヒューマンエラー研究がある。ヒューマンエラーとは、認知科学、工学などの分野で用いられる概念で、人間が原因で起こるシステム上の不具合を指す。ヒューマンエラー研究は、人間内部の情報処理によって生じるエラーの説明と応用を行う研究分野である。この分野ではエラーを、入力エラー、媒介エラー、出力エラーの三つに分類する。そのうち、外国語学習教材の改善に関わるのは、入力エラーである。これは、対象の取り違えに関わるエラーであり、例えば、A、Bの正しいほうを選ぶ判断が難しいことが原因となる。このエラーへの対応として、例えば色分け、形わけのように、情報表示の方法、装置を改良することが対処法とされる。

外国語学習のコンテンツを一つのシステムと捉えるならば、ヒューマンエラー研究は外国語教育にも応用可能である。ヒューマンエラー研究は、人間の情報処理活動とそこに現れる「誤り(エラー)」をテーマとして扱うものであり、外国語教育における第二言語習得とそこに現れる誤用と共通点がある。ヒューマンエラー研究の知見から、習得の難しさに新たな介入ができると考えたことが本研究の着想に至った経緯である。

2. 研究の目的

自動詞、他動詞を色分けして提示することが、学習者の自動詞、他動詞を区別して記憶することの助けになるのかどうかを明らかにする。1990年以降、意味中心の言語活動で言語形式に気づかせる教授方法(Focus on Form)が注目され、日本語教育でも、タスク中心の教授法(Task Based Language Teaching)へと発展している(小柳 2004)。本研究では、自動詞、他動詞を色分けして提示することが、学習者が自動詞、他動詞を区別して記憶することを助けるのではないかと予想し、その効果を検証する。また、その効果を反映させた自動詞、他動詞の学習教材を作成する。

3. 研究の方法

自動詞、他動詞を色分けすることの効果を実証するために、調査では学習者が自動詞、他動詞を記憶する場面を設定し、二種類のフラッシュカード(自動詞、他動詞を色分けしたカード/単色のカード)を用意した。カードでは、自動詞、他動詞の区別を表わすために、筑波ランゲージグループ(1994)に従い、他動詞は<+を>、自動詞は<-を>と表示した。なお、<+を>は格助詞「を」

が共起すること、< - を > は共起しないことを表す。この表記は、自動詞、他動詞という概念は学習したものの、「自動詞」、「他動詞」という文法用語の区別が難しい初中級レベルでも利用できるように配慮したためである。

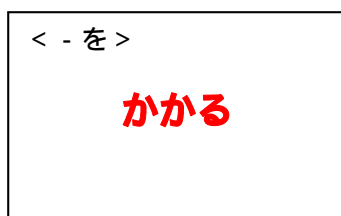


図2. カードの例 (自動詞)

調査では、日本国内外で日本語を第二言語として学ぶ学習者に、これら二種類のフラッシュカードのいずれかを用いて学習してもらった。事前テストでは、25個の動詞を自動詞、他動詞に分けてもらった。続いて、先のカードを用いて自動詞、他動詞の区別をしながら記憶した。その直後に事後テストを行った。事後テストでは再び、事前テストと同じ動詞を自動詞、他動詞に分けてもらい、正答率の伸びを見た。

4. 研究成果

事後テストでの成績の伸びを、二種類のフラッシュカードの違いによって比較したところ、色分けしたフラッシュカードを用いる学習者と単色のフラッシュカードを用いる学習者では、いずれの場合も成績が向上したが、両群の成績には差がなかった[F(1,85) = 0.406, p < .001]。

ただし、もともと事前テストで成績が低かったグループ(n=21)では、色分けしたフラッシュカードを用いる学習者(n=12)の方が、単色のフラッシュカードを用いる学習者(n=9)よりも事後テストの成績において、正答数の標準偏差が大きかった(色分け M=3.9, SD=3.2; 単色 M=4.0, SD=1.7)。この結果から、色分けし、動詞の文字色をカラーにして目立たせることが、単色で提示される場合に比べて、自動詞、他動詞の記憶をより向上させるわけではないが、自動詞、他動詞の区別があまりできない段階で色分けしたフラッシュカードを用いた場合には、成績がより伸びる学習者とより伸びない学習者に分かれることが示唆された。

本研究では続いて、教材作成につなげるために、授業実践として自動詞、他動詞の形態を区別して覚えるための教材「自動詞・他動詞カード」と、文脈上の区別を行う教材「自動詞選択ワークシート」を作成し、教師、学習者の双方向のやりとりによる授業を行った。

この授業実践をもとに、研究のまとめとして教材が開発された。この学習教材では、動

詞の色を、学習者の判断で、単色か、色分けしたもので、自由に選んで学習できるように設計した。この教材は、研究代表者のホームページ上の学習コンテンツ「やってみよう日本語クイズ」のクイズ2(中級以上向け)、クイズ3(初級後半以上向け)として公開されている。なお、この二つのクイズでは、動詞の種類の高さや構文の難しさが異なっている。

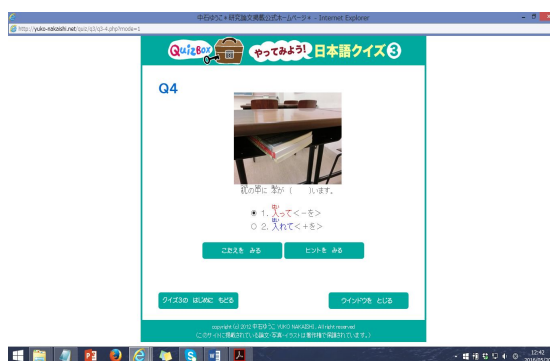


図3. 日本語クイズ3の例 (ホームページより)

開発にあたって、パソコンを用いたインターネット上での操作では、問題文の括弧の中に当てはまる動詞を、選択肢から選んで、ドラッグし、ドロップする動作は技術上難しいことが分かったため、タブレット端末用の学習アプリとしても同様のクイズを作成し、公開した。

今後は、本研究で作成した教材を用いることの効果を測定し、自動詞、他動詞の習得の流れに沿った学習方法を実証したい。

<引用文献>

小林典子、相対自動詞による結果・状態の表現-日本語学習者の習得状況-、文藝言語研究。言語篇、29、1996、pp.41-56。

小林典子 第8章 効果的な練習の方法うまく習得してもらうには工夫がいる、日本語学習者の文法習得、2001、pp.139-158

小柳かおる、日本語教師のための新しい教育理論、2004

佐久間鼎、現代日本語の表現と語法、1936、pp.114-138 (くろしお出版より1983年復刊)

Morita, M. The acquisition of Japanese Intransitive and transitive Paired Verbs by English-Speaking Learners: Case Study at the Australian National University、世界の日本語教育、vol.14、2004、pp.167-192

<参考資料>

筑波ランゲージグループ、Situational

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

中石ゆうこ、日本語を母語とする二幼児の自動詞・他動詞の誤用、県立広島大学人間文化学部紀要、第11号、2016、pp.75-85

中石ゆうこ、第二言語としての日本語の自動詞・他動詞の双方向型教材の開発 形態的区別に着目して、県立広島大学総合教育センター紀要、第1号、2016、pp.69-74

〔学会発表〕(計1件)

中石ゆうこ、日本語学習者が視覚的に「わかる」教材づくり 自動詞・他動詞を例にして、語学教育におけるプレイスメントテストの効果的な活用と教育効果の測定に関する共同研究プロジェクト講演会(ワークショップ) 別府大学日本語教育研究センター、2016年2月20日、大分県別府市

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

ホームページ「やってみよう日本語クイズ」クイズ2(自動詞・他動詞クイズ、中級以上向け)

<http://yuko-nakaishi.net/quiz/quiz2.htm>

|

クイズ3(自動詞・他動詞クイズ、初級後半以上向け)

<http://yuko-nakaishi.net/quiz/quiz3.htm>

|

6. 研究組織

(1)研究代表者

中石 ゆうこ (NAKAISHI, Yuko)

県立広島大学・総合教育センター・助教

研究者番号： 20535885

(2)研究分担者 なし

(3)連携研究者 なし